

# まんだら通信

第239号(通巻274号)

平成28年05月 西暦2016年 佛暦2582年 皇紀2676年

安房国八十八ヶ所 第一番札所  
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍涉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org



## 阿字の子が：

年配の方は覚えておられませんが、昭和三十年代まででしようか、大抵の人は住み慣れたわが家の、畳の上で臨終を迎えました。小学校に上がる前に亡くなる子も沢山いました。

そんな時、親兄弟、親戚の人たちがまくら元に集まり、急を聞いて駆け付けた近所の人たちも、遠くから取り巻いて別れを惜しみました。愈々臨終になると、誰もが体中で思いぎり悲しみを表わしました。

それは、お釈迦様の涅槃図

そのまま、人間が何千年来続けてきた光景でした。現在のスリランカでもそっくりそのまま、別れの悲しさの中にも、人間的な温かさが漂うその様子には、本当に感動した覚えがあります。

家内の母親は、がんで亡くなりました。大腸ガンと診断されてから五年、四回の手術で入院を繰り返して、最後の手術の後、回復の見込みがないという担当医の説明で、痛み止めの全身麻酔をして、意識が戻ることなく、そのまま亡くなりました。ガンであることは最後まで教えませんでした。

栃木の平野部では珍しい、大雪の夜でした。建物や設備が新しいその大病院は、医師も看護婦さんもみな優しい人ばかりで、文句の付けようは勿論ないのですが、臨終間際、部屋の外に皆が出され、「お入り下さい」と言われたときは、既に亡くなった後だったこと、ガンであることを隠し続けねばならなかったことが、未だに何よりの心残りだと家内は言います。

現在、老衰などの例外を除いて、住み慣れた我が家で生涯を終えることは、難しくなっています。

病院には、病院としての言い分や、手続きがあるであろうことは分かれます。

けれども、残されるものは、愛する人の肌のぬくもりが、だんだんと失せて冷たくなってゆくことを自分で確かめ、思いぎり涙を流して、はじめて別れを納得できるものだと、私は思うのです。

心電図や脳波の波形によってではありません。

ガンに罹った人に「あなたはガンです」と教えるかどうかにしても難しいことです。でも：私は教える欲しいなあ

思います。たとえ親切からとは言え、ウソはやだし、うそをつきとおす周りをもつと大変でしょう。

ここまでは前置きで、標題の「阿字の子」のことです。勉強した人はお分かりかと思いますが、「阿字の子が阿字のふるさとをたのんで、またたかえる阿字のふるさと」という、お大師様が詠まれた詠歌があります。真言宗のお塔婆の、上から五番目の梵字。『ア』と読みます。仏の中の仏、大日如来を表します。

私たち「阿字の子」つまり仏の子は、仏の世界からこの娑婆世界に生まれてきて、娑婆世界という舞台の上で喜怒哀楽の生活をしながら、人様に支えられ、人様を支えて、「帰っておいで」と言われた時、そしてまた仏さまの世界に帰ります。

いつ帰るのか、つまり死ぬのはいつか、自分には要らない人間なのか、などということはすべてをお見通しの仏様にお任せすればよいので、私たちは考える必要は、つゆほどもないので

す。私たちがすることは、寝たきりは寝たきりで、元気は元気で悔いのない今日を生きるにはどうすることが相応しいのかを考えることでしょうか。

序でにその奥さん。「うちの縁でなしの宿六が」などと、ゆめゆめ言っではいけません。だって出雲の神様が、お二人のために、よく相談して決めてくれた、この上ない良縁なのです。

昔、有名な噺家さんが「人間はいいところ半分、欠点半分だそうだな。いいところだけ見ながら夫婦をやっているならば、なにに、共白髪の五十年やそこらすぐですよ。」といっていました。

寺伝によると、紫雲寺は五百メートルほど離れたところにありましたが、『元禄の山津波』で壊されたのち、今の場所に移転しました。

落慶を祝って、時の代官さんが奉納したものが写真の大きなソテツです。お寺の宝といっている立派なものです。私が弟子入りしてから六十年余り、当時と同じ背丈で全く変わっていません。



親戚筋にあたる大田とみ先生は、平成十年の今月亡くなりましたが、私の生い立ちをご存知でしたから、「方丈様は小さい時から」苦勞が多かったから」というのが、お会いするたびの口癖でした。

生母とは三歳の頃に生き別れ、再婚した父親は、私を地元の姉に託して満州に渡り、その後ソ連の侵攻で医師として勤務先の開拓団員と一緒に全滅しました。父の姉、つまり伯母が、感じやすい五歳から一三歳までを養育してくれました。

戦中戦後のあの頃は、農家であっても食糧統制で自由にならず、預かった子の食い扶持の工面は大変だったはず。ただでさえ、ひねくれがちな私を庇うとなれば、他の家族に気を使うことも多かったでしょう。

でも、当時の世の中を見渡せば、私よりも遙かに苦勞した子供は沢山いましたし、これが縁になって、素晴らしい弘法大師のお弟子になれました。都合、四人の母親に巡りあうことが出来、これ以上の幸せはありません。折しも五月八日は母の日。



につぼん人情小斬 三遊亭鳳豊  
第一二四話 町が家

春爛漫。ビジネス街を歩いていると、いかにもフ  
レッシュマンらしい若い社員たちとすれちがいます  
が、いいですねえ。

ある会社で、新社員が突然、社長室に来るよう  
に言われたそうです。なんだろう、と思いながら、エ  
レベーターで社長室のある階に降りると、『美人の社  
長秘書が満面の笑みで社長室に案内してくれました。

「社長、営業二課の新人のMOKUさんです」

「おお、君か。まあ、そこに座って」

なんだろうと思って緊張していると、目の前にど  
かと座った社長が、いきなり彼に「君の一番大切な  
ものはなんだい？」と聞いたそうです。(え、大切な  
もの？)突然の社長の質問に、頭の中は、ぐるぐる回  
りました。仕事？ 家庭？ お金？ 彼女？

MOKU君、どうせ言うなら、でっかいことを言  
てやるつと、思わずこう言いました。

「はい、この美しい地球です」と。えらいものです  
ねえ。

すると、社長、彼順一笑、ガハハと笑って、「君に  
やってもらいたいことがある。君にしか頼めないこと  
だ。内容は、あとで、営業部長から聞いてくれ。ご苦  
労さん」と言ってお立ち上がったそうです。

その後、営業部長から告げられた社長の伝言は、  
「社長夫人の故郷の町で、一年に一回、大掛かりな川  
の清掃があるので、夫人に代わって行ってくれ」と  
ということでした。一泊二日。もちろん、仕事では  
ないですから、会社からは一銭も出ませんでしたの  
で、全部、MOKU君の自腹。それでも、何か将来、  
いいことがあるかもしれないと、泥まみれになっ  
ていたそうです。しかし、それから一年後には、社長の  
退陣とともに営業部長も左遷され、この話を知って  
いる者は社内にとりもいないということ。まさ  
に、ボランティアですが、今日の話も、実際のボラ  
ンティア活動のなかで起こった話です。

ある地方都市にNPO法人が運営している施設があ  
ります。名前を仮に「キララの家」としておきましょ  
う。

大きな民家を借り切って、一人暮らしで病気のお年

寄りから、障碍を持った人たち、さらには親  
のいない子供たちがいっしょに暮らししていま  
す。もう、この施設ができて二十年になるそ  
うです。

そんな「キララの家」を作ったのは、今年七  
十歳になる中山幸三さん(仮名)。自分が生ま  
れ育った地域を、自分たちの力で、自分が死  
ぬまで住み続けたい町にしたいと思ったから  
でした。そのために、若いころから、ボラン  
ティアの勉強を続け、施設設立のための準備  
をし、五十歳を機に、会社をやめて始めまし  
た。

中山さんがえらいことは、ただ、NPOを  
運営するだけでなく、地域の人々を仲間に引  
き入れたことでした。

「みんな、自分に出来ることを見つけて、好き  
な時に好きなことをやってくださって結構で  
す。ただし、皆さんに決して、迷惑をかけな  
いようにね。」

中山さんの人徳でしょうか。次々と施設の  
ためのボランティアが集まりました。三十数  
名。二十年経った今、半分ぐらいいは入れか  
わっても三十人を欠けることは一度もなかつ  
たそうです。彼らの合言葉は「自分の将来の  
ため、自分が何かあった時のため」でした。  
勿論人のためですが、最終的には自分のため  
です。ある人は施設の周りに花壇を造りまし  
た。またある人は仲間と施設内の食事を  
提案し、みんなでおかずを持ち寄り、近所の  
人たちも集めて「ごちそうさまの会」を始め  
ました。やがて、この中山さんの運動は、施  
設外に広がり、近所の家の留守中の植木の手  
入れから、犬の散歩、子育て支援の助け合い、  
配食サービス、障碍者の外出の介助、不要に  
なった本を集めた図書館、得意の腕を生かし  
た書道教室など、まさに、地域住民が力を合  
わせ、町は理想の「心あたたか地域」になっ  
たのです。

そんなある日のこと、一人の少年が「キラ  
ラの家」に連れて来られました。両親が離婚

し、母親は再婚。父親が亡くなったため、家  
出をしワルの仲間に入り、少年院に何度も出  
たり入ったりという札付きの少年でした。た  
またま、警察から中山さんが頼まれて、この  
少年の保護観察の大役を引き受けたのです。  
少年はふてくされていました。その時、中  
山さんはこの少年に言いました。「この家が  
嫌だったらいつでも出て行っていいぞ。で  
も、この町は出るな。この町が君の家だと思  
っていいからな」

ボランティアの人たちがこの町のあちこち  
にいるから、なにかあったら、だれでもいい  
から相談しろという意味でした。

ボランティアの人たちは、すぐにこの少年  
の歓迎会を企画しました。各家庭からおかずを  
持ち寄り、とん汁を作り、ただし、おにぎり  
は自分で握るといふ食事会です。認知症のお  
ばあちゃんも、障碍を持った子供たちも、  
みんなわいわい言いながら、自分の分のおに  
ぎりをつくり、食事を楽しみました。

少年は、中に貝をたくさん入れた大きなお  
にぎりをつくり、それはそれはおいしそうに  
食べたそうです。それを見た子供たちが大き  
な声で笑います。おばあちゃんは、少年が食  
べこぼしたごはんつぶを拾って口の中に入れ  
ます。今度は、少年が笑います。おばあちゃ  
んたちもまた、大笑い。

それから一年、少年は近所のスーパーで仕  
入れから販売まで、一生懸命働いています。  
それまでこの施設に入れても一週間で飛び  
出してしまった少年がなぜ逃げないのか、中  
山さんは少年に聞いたそうです。

少年は、明るく、こう言いました。  
「逃げる気がおきないんですよ。だって、  
もうこの町には、あちこちで『ありがとう』  
という言葉が洪水のようにあふれてるから  
さ」

中山さんは、この時、あのマザーテレサの  
言葉を思い出したそうです。  
「人は、ひと切れのパンよりも、小さな微笑  
みに飢えているのだ」

と、咲く花が多すぎて却って  
困るほどになります。  
で、今月はキラソウ【シソ科キ  
ラソウ属】別名ジゴクノカマ  
ノフタです。別名も含めて、名  
前についてはいろいろの説があ  
るようですが、なぜそういう名  
前なのか、どれもよくわかりま  
せん。花の大きさは3ミリほど。  
しゃがんでよく見ないとわから  
ない野草です。それでも私たち  
にはわからない何らかの理由が  
あって、地球の一角に生きてい  
ると思えば、何やら愛おしく思  
えます。日当たりの良い地面に  
張り付いて生えています。



2016.05.09 龍涉

▼暑からず寒からず、四季のうち  
で一番過ごしやすい季節が来まし  
た。先月はこのコンピュータが突  
然「痴呆症」になって、目を白黒  
させましたが、なんとか復活して  
くれました。  
とは言え、コンピュータという  
装置を動かすエンジン、基本ソフ  
トが進歩したのはいいのですが、  
以前書いたものが読めない、と  
いう致命的な不具合も起きます。  
まんだら通信も、10年前のもの  
が読めなくなりました。今のうち  
に、なんとか工夫しなければと思  
っています。  
▼先月、縄文時代の貝塚のことで  
気づいたことがあります。貝塚は  
ゴミ捨て場だと、ずっと思ってい  
ましたが、ここは終わった命を祀

余滴